

広島女子高等師範学校から広島大学再編における音楽教員養成

— 体育・音楽教員養成から音楽教員養成へ —

鈴木慎一郎*

Music Teacher Training from Hiroshima Women's High Teacher's College
to the Department of Education, Hiroshima University

: From PE and Music Teacher Training to Music Teacher Training

SUZUKI Shinichiro*

キーワード：広島女子高等師範学校，広島大学教育学部，体育科，音楽教員養成，カリキュラム

Key Words：Hiroshima women's high teacher's college, The department of education, Hiroshima University,
Physical education, Music teacher training, Curriculum

はじめに

本稿の目的は、広島女子高等師範学校から広島大学教育学部へ昇格に至るまでの過程における戦前から戦後への教員養成の再編の一端を音楽教員養成に着目して明らかにすることである。

筆者は師範学校から新制大学の再編に関して、次の5ケースに分類し、比較考察を行い、再編の違いによる特色を検証している。広島大学は下記のivに該当し、表1の通り再編される。

- | | |
|--------------------------|-------|
| i 師範学校→単科の学芸大学 | 7 大学 |
| ii 師範学校+専門学校→総合大学の学芸学部 | 19 大学 |
| iii 師範学校+高等学校→総合大学の教育学部 | 17 大学 |
| iv 師範学校+高等師範学校→総合大学の教育学部 | 2 大学 |
| v 師範学校+帝国大学→総合大学の教育学部 | 1 大学 |

高等師範学校に関しては、東京高等師範学校、広島高等師範学校の他、1944（昭和19）年創設の金沢高等師範学校、1945（昭和20）年創設の岡崎高等師範学校があった。女子高等師範学校に関しては、東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校の他、1945（昭和20）年に広島女子高等師範学校が創設される。師範学校、中学校、高等女学校の中等学校の音楽教員養成は、東京音楽学校甲種師範科が担っていたため、上記の高等師範学校、女子高等師範学校では行われていなかった。かろうじて、東京女子高等師範学校の体育科の中で体操に加えて音楽の教員免許状も取得できた。

師範学校と再編された高等師範学校、女子高等師範学校は、金沢大学と広島大学の2大学である。金沢高等師範学校は理数系教員養成を中心とし、音楽教員養成は行われていなかったため、本稿では広島大学を事例とする¹。

沿革史に関しては、『広島大学二十五年史』（1979）、『広島大学五十年史』（2007）、『広島大学の五十年』（2007）と丁寧に編纂されている。また、広島女子高等師範学校に関しては、『「時」のかたみ

* 鳥取大学地域学部地域教育学科

に』(1998)、広島大学教育学部福山分校に関しては、『記念誌』(1989)も編纂され、当時の証言も掲載されている。

広島大学の再編を扱った先行研究としては、寺崎昌男(1971)²、三好信浩(1991)³、竺沙知章(2001)⁴が挙げられる。中でも三好は『日本師範教育史の構造：地域実態誌からの解析』(1991)において広島大学教育学部の統合の特色について以下の4点を挙げる⁵。

- ①日本の師範教育史において長い間二極に分かれていた初等師範教育と中等師範教育の2つの系譜が1つに統合されたこと。
- ②文理科大学の教育学科の講座を引き継ぎ、教育学と心理学の2学科を設けたこと。
- ③高等師範学校における中等教員養成の機能を引き継いで、高等学校教育科を設けたことも注目すべきこと。
- ④教員養成の開放制の原則を尊重して、文学部、理学部、政経学部などと協力して学部相互の補完体制をとるとともに、他学部学生に対しても中等学校教員になる途を開いたこと。

広島女子高等師範学校を主に対象とした先行研究としては、田中卓也「広島女子高等師範学校と女子学生文化の胎動」(2007)が挙げられる。広島女子高等師範学校の創設と変遷について女子学生の文化を切り口に考察しているものの、カリキュラムや教員養成を対象とした研究ではないため、「体育科については「音楽理論」・「声楽」・「器楽」・「音楽史」と四科に分かれていることから、専門的な内容が教えられる」との記載に留まっている⁶。

その他、広島大学教育学部日本東洋教育史研究室発行の『中等教員史の研究』第一輯(1987)によって広島における中等教員養成の変遷が検証されているものの、広島女子高等師範学校に関する記述に関しては、3頁と少なく、沿革史によってすでに明らかにされた内容が中心で、具体的な状況については掲載されていない。

このように広島大学は、文理科大学、高等師範学校、女子高等師範学校、師範学校、青年師範学校といった戦前の教員養成機関が結集されて再編された唯一の事例である。また、戦後の広島大学においては、高等学校教員養成や研究者養成等にも手掛け、他の教員養成学部とは異なる特色を有している。そこで本稿では広島大学において音楽教員養成がどのように樹立していったかについて明らかにしたい。先ほど列記した通り、沿革史、先行研究とも豊富にあるのだが、教育制度に関する研究のため、音楽教員養成の視点では論じられていない。筆者はこれまでに「高等師範学校、女子高等師範学校における音楽教員養成」(2003)⁷、「戦前における音楽教員養成の独自性」(2006)⁸を発表したものの、東京女子高等師範学校を主たる事例として挙げ、広島女子高等師範学校の詳細については取り上げていなかった。本稿ではそれらを補完しながら、考察する。

本研究は初等教員養成を担っていた師範学校を中核に置いた再編を検証している。表1に示した通り、広島大学教育学部は、広島文理科大学、広島高等師範学校、広島女子高等師範学校と広島師範学校、広島青年師範学校が母体となって組織される。しかしながら広島師範学校男子部は広島大学教育学部東雲分校、広島師範学校女子部は広島大学教育学部三原分校となり、小学校教育科、中学校教育科の二年課程のみしか置かれていなかった。四年課程は教育学部本部が担当し、中学校教育科ならびに高等学校教育科の音楽は、教育学部福山分校が担当していた。そこで本稿では広島師範学校を主たる対象とせず、教育学部福山分校の母体となった広島女子高等師範学校を取り上げる。

研究方法として、第一に広島女子高等師範学校体育科のカリキュラムを概観する。第二に広島大

学教育学部福山分校音楽科の発足期の音楽教員養成に関して、カリキュラム、教員組織、施設・設備等の視点から明らかにする。

表 1 広島大学の再編

戦前		戦後	
広島文理科大学	広島市東千代田町	文学部 理学部	広島市東千代田町
広島高等師範学校	広島市出汐町	教育学部	
広島女子高等師範学校	広島市千田町	教育学部福山分校	福山市緑町
広島青年師範学校	高田郡吉田町	水畜産学部	
広島師範学校 男子部 女子部	広島市東雲町 三原市館町	教育学部東雲分校 教育学部三原分校	広島市東雲町 三原市館町
広島高等学校	広島市皆実町	皆実分校（教養部）	広島市皆実町
広島工業専門学校	広島市千田町	工学部	広島市千田町
広島市立工業専門学校	広島市東雲町		
広島県立医学専門学校	広島市皆実町	医学部	広島市霞
		政経学部	広島市江波町

出典 『広島大学五十年史』資料編下，2003年から作成。

1. 広島女子高等師範学校体育科の概観

1) 戦前の広島女子高等師範学校

財団法人山中高等女学校の国家寄付により，1945（昭和20）年3月，広島女子高等師範学校は広島市千田町に創設される。広島女子高等師範学校は，各科の定員は30名で「理科（数学選修・物象選修・生物選修），家政科（育児保健選修・被服選修），体育科」で構成される。ちなみに東京女子高等師範学校では「文科・理科・家政科・体育科」⁹，奈良女子高等師範学校では「文科・理科・家政科」で構成された¹⁰。広島女子高等師範学校では，東京と奈良に置かれていた文科が設置されていない。その理由としては，当時，理科と体育の教員が不足していたのに対し，文科の教員は余っていたためである。また，奈良女子高等師範学校では体育科がなかったため，広島に新設された¹¹。

体育科の入学試験には，書類審査，筆答試験，口頭試問に加えて実技調査も行われ，レコードを聴いて，何拍子かを答える問題やバレーボール，女子青年体操，ダンス等が課せられる¹²。結果，51名の出願の内24名が合格となる。入学式は1945（昭和20）年7月21日に実施されたものの，空襲によって鉄道が寸断されたため，90名の入学生は揃わなかった。初授業を予定していた8月6日，原子爆弾の投下を受け，爆心地より1.7kmの近距離であった校舎は全焼¹³。一度も授業は行われないまま敗戦となる¹⁴。

表2は，実施はされていないが，1945（昭和20）年創設時の「広島女子高等師範学校学科課程表」である。ここから算出すると，体育関係の科目は45時数，51.1%，音楽関係の科目は43時数（個人教授を含む），48.9%と，ほぼ均等な時数配分がされている。1943（昭和18）年度の東京女子高等師範学校体育科を見ると，体育関係の科目が52.2%，音楽関係の科目が47.8%であった¹⁵。この点から見ても，広島女子高等師範学校のカリキュラムは，東京女子高等師範学校同様，体育・音楽教員養成を図ろうとしていたことが分かる。その他，声楽の独唱や器楽のピアノは，個人教授で指導する計画であった。

ここで体育科の中で体育・音楽教員養成が実施された背景について整理しておきたい。『お茶の水

『女子大学百年史』によると、体育科の中で音楽教員養成を行った背景には「良い体育教師の育成には音楽の訓練もまた不可欠である、という発想に基づいた」と説明される¹⁶。また、掛水通子は「体育と音楽は密接に結びついた教科で、当時の体操、遊戯の伴奏には音楽が不可欠であった」と述べる¹⁷。東京女子高等師範学校に体育科が設置されたのは、1937（昭和12）年である。それ以前にも、1903（明治36）年の女子高等師範学校には「国語体操専修科」が置かれたり¹⁸、私学ではあるが、1902（明治35）年、東京女子体操音楽学校（現、東京女子体育大学）が創設されたりしていた¹⁹。当時、女子が体育教員になることを、無条件で受け入れるといった一般的社会情勢ではなかったために、他教科との抱き合わせとなったとされる²⁰。寺田和子は「東京女子体操音楽学校は体操と音楽を入れかえて「音体」と呼ばれるようになる」と記す²¹。また、渡辺裕は「唱歌遊戯の場として「音体」という女性のための学校が全面に出てきている」と述べる²²。東京女子体操音楽学校は「女子師範学校及高等女学校ノ体操音楽科ノ教員養成」を目的としていたが²³、1925（大正14）年、「体操」の中等教員無試験検定許可を受けたものの、「音楽」については許可を受けていなかった²⁴。そのため1944（昭和19）年、専門学校昇格の際には、「東京女子体育専門学校」と改称され、「音楽」が削除される²⁵。したがって、体育・音楽教員養成を実際に実施していたのは、東京女子高等師範学校のみである。

表2 学科課程表 体育科 1945（昭和20）年

	1学年	2学年	3学年	4学年	計
修身公民	2	3	2	3	10
教育	2	2	4	4	12
家政		1		1	2
国語	2	2	2	2	8
体育学	4	1	2	2	9
体操	6	6	6	6	24
武道	2	2	1	1	6
教練	2	2	1	1	6
音楽理論	1 楽典	3 楽典、楽式、 和声学	3 管絃楽大意、 和声学	3 対位法、 指揮法、作曲	10
声乐	5 基本練習、 聴覚訓練、合唱	3、個人教授2 合唱、独唱	3、個人教授2 合唱、独唱	3、個人教授2 合唱、独唱	14 個6
器楽	個人教授2 ピアノ	個人教授2 ピアノ	個人教授2 ピアノ	個人教授2 ピアノ	個8
音楽史		1 日本音楽史	2 西洋音楽史	1 西洋音楽史	4
美学				1	1
外国語 独語	2	3	1		6
修練	2	2	2	2	8
計	30 個人教授2	30 個人教授4	30 個人教授4	30 個人教授4	120 個14

備考 本表ノ外夏期ニ於テ水泳・冬期ニ於テ雪滑ヲ課シ第四学年ニ於テ教育実習及保育実習ヲ課ス
 出典 『「時」のかたみに』1998年、9頁。

2) 戦後の広島女子高等師範学校

1945（昭和20）年9月7日、吉田町の広島青年師範学校へ一時移動し、授業を開始する。12月5日、安浦町の旧海兵団跡に移転する²⁶。広島高等師範学校の授業再開が1946（昭和21）年2月12日と比べると、非常に早い開始である²⁷。1946（昭和21）年1月、「広島女子高等師範学校学則」が規定される。下記はその一部である²⁸。

第四条 学科ハ理科・家政科・体育科トス

第七条 体育科ノ履修スベキ学科目左ノ如シ

修身公民，教育，家政，国語，体育学，体操，音楽理論，声楽，器楽，音楽史，美学，外国語

表3は、卒業に必要な単位配分、表4は体育科の専門科目の単位配分を一覧にしたものである。表3を見ると、「社会科学，人文科学，自然科学」等に分けられた「一般教育科目」が設置され、新制大学に近いカリキュラム編成になっている。

表3 卒業に必要な単位配分 体育科 1946（昭和21）年

		1 学年		2 学年		3 学年		4 学年		計
		1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	
一般 教養 科目	社会科学	2	2	2	2					8
	人文科学	2	2	2	2	2		2	2	14
	自然科学	2	2							4
	選択科目	3	3	3	3	3		4	4	23
	体操	1	1	1	1	1		1	1	7
教職 科目	講義演習	2	2	4	4	4	2	3	3	24
	実地練習						10			10
専門科目		10	10	12	12	12		11	9	76
単位計		22	22	24	24	22	12	21	19	166
英語		4	4	3	3	3	2	2	2	23
合計		26	26	27	27	25	14	23	21	189

出典 「広島女子高等師範学校学科課程」昭和21年（昭和22年度広島女子高等師範学校「学校一覽」）

（『広島大学二十五年史 包括校史』1977年，488頁）

表4 専門科目の単位配分 体育科 1946（昭和21）年

	1 学年		2 学年		3 学年		4 学年		計
	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	1 期	2 期	
体育運動論	1	1							2
体育理論							1	1	2
体育史			1	1	1				3
体育心理			1	1					2
解剖・生理	1	1							2
運動生理			1	1					2
体育管理及行政							1		1

体力測定身体検査法					1			1	2
体育指導論					1				1
体育実習 (体操・スポーツ・ダンス)	4	4	5	5	6		6	4	34
音楽理論	1	1	1	1	1		1	1	5
声楽	2	2	2	2	1		1	1	11
器楽	1	1	1	1	1		1	1	7
美学							1	1	2
計	10	10	12	12	12		11	9	76

出典 「広島女子高等師範学校学科課程」昭和21年（昭和22年度広島女子高等師範学校「学校一覧」）

『広島大学二十五年史 包括校史』1977年，492頁）

表4に基づくと、体育関係の科目は51単位、67.1%、音楽関係の科目は25単位、32.9%と、体育関係の科目が圧倒的に多く、7割近く占める。表2に示した戦前のカリキュラムと比較すると、音楽理論や音楽史といった音楽関係の科目が削減されたため、体育関係の科目の比率が高まる結果となった。戦後の1946（昭和21）年に着任した水野康孝は「女高師体育科で音楽の免許状を出す事にしたいと言う事に魅力を感じ」、大阪府立女子専門学校から異動する²⁹。しかし「体育科で音楽の免許状を出す事は授業時数等の関係から不可能と決まり私の希望は崩れてしまいました」と回想する³⁰。この点から、広島女子高等師範学校は、音楽教員養成の環境が十分整備することができなかったために、東京女子高等師範学校体育科で行われていた体育・音楽教員養成を実現することができず、体育教員養成に限定されていたことが分かる。

では、広島女子高等師範学校体育科の中でどのような音楽教育実践が展開されたのだろうか。1945（昭和20）年入学の体育科1期生の大山昭子は次のように回想する³¹。

安浦に移って、やっと大学生としての授業が始まったものの、24名入学したクラスメートは12名になっていた。2年生の夏休みが終わった時、岡本さんが退学したので、結局11名が最後まで残ったことになる。

授業を受けながら、私達は石ころだらけのグラウンドの石拾い、草むしり、砂運びなどして、スコップや鍬でトラックやコート作りの作業を積極的にやり、また、床の抜けそうな兵舎に雑巾をかけ、舞踊するためのフロアを作ったことなど、懐かしい思い出となっている。1台のピアノに11名の者が時間割りを作り、それを毎日、ローテーションしながら練習した。最終の者が練習を終るのは消灯間際になることもあった。

同じく体育科1期生の朝田恵美子は、次のように振り返る³²。

体育科では、ピアノの実技があり、ピアノは1台か2台しかなく、その他の楽器も少なく、そのピアノの練習のために、体育科生には夜中までスケジュールが組まれ、夜中の2時～3時に当たった時は、寮から、真暗な校舎の間を通り、ピアノ室まで歩いて行くことが恐ろしいと云うよりも、何か、必死の使命感に取りつかれて、練習に通ったものでした。しかし、いかんせん、練習時間は少なく、ピアノはいつまでも上達せず、水野先生、糸賀先生からは、いつも難しい顔をされたものでした。

しかし、水野先生のすばらしい歌声や、糸賀先生の「楽器が弾けるのは、人生でもすばらしい事だから、しっかりやりなさい」という言葉に励まされ、何とか乗り切った感じでした。才能のある人は上達が早く、才能のない私などにはつらい日々でありました。

その頃、体育科の授業は、午前中は講義、午後は実技。即ち、陸上競技一般、球技一般、ダンス、体操その他が組み込まれていました。特にダンスは、早朝練習がありました。

ここから安浦町時代は、ピアノが1、2台しかない環境でも、ピアノの指導が実施され、生徒たちも熱心に練習していたことが読み取れる。

水野の授業について、体育科ではないが、理科1期生の伊藤静子は次のように振り返る³³。声楽を専門とする水野だけあり、日本語の発音に留意した指導を展開し、女子学生にも好評であったことが読み取れる。ただし、テキストはそろわず、教材をプリントするにも用紙は学生自らが用意しなければならなかった³⁴。

美しい声で指導して下さる水野康孝先生の音楽の時間が、こよなく楽しいときでした。理科の生徒に配慮された、先生独得の授業だったのでしょう。

あの頃の藁半紙に謄写版刷りの楽譜は、50年を経て、茶色に変質して隅はボロボロです。でも、大事に残っています。沢山の歌の中で、山田耕筰作曲の《峰の春》《山の姫御》など、BKの《思いでの町》も…。今のテレビなどで到底聞くことのできない歌が、先生のお声で、私の片方の耳に残っています。

そして、私にとって忘れることの出来ないのは、「みなさん、教師になろうというなら、もっと美しい日本語で話さないか」とおっしゃったこと。濁音の柔かく綺麗な発音を教わりました。先生の日本語の歌が、耳に快くひびく理由が分かりました。

原爆で傷だらけになり、子供たちから「お化け！」と逃げられる顔になってしまった私は、せめて話す言葉なりと、美しくありたいと、この時思いました。そして、自分の濁音を変える努力をしました。

家政科（保健選修）の2期生の青山タカオは水野について次のように記す³⁵。

いい指導者にいい曲をしっかりと教えて頂いたので、今でも自分のパートを譜をみないでも歌うことができる程にみについている。

いい歌を沢山教えてもらったことはほんとうに幸せだと思う。水野先生に授業では1週に1曲ずつ日本の歌を教えて頂いた。それらの歌を思い出したり、曲を聴いたりするたびに、それらを習った安浦時代が思い出され、私の心を温かくしてくれるのである。

また、青山は、1948（昭和23）年6月13日、広島高等学校講堂で開催された「春の学生音楽祭」において合唱を発表する（写真1）。指揮は水野で、曲目はグノー作曲の《兵士の合唱》と《舟人》を歌う³⁶。

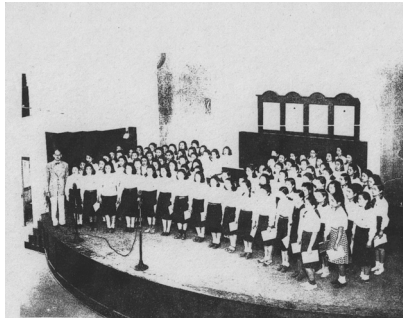


写真1 春の学生音楽祭 1948(昭和23)年6月13日

出典 『「時」のかたみに』1998年, 216頁。

1期生の教育実習については、原爆投下後の大変な時期にもかかわらず、1948(昭和23)年9月から12月までの4カ月にわたり、幼稚園、小学校、中学校、高等学校とすべての校種において下記の内容で実施される³⁷。この点からも教員養成機関としての強い使命感がみられる。

9月2日～9月11日 特別授業時間割 9月9日：附属中・小見学
 9月13日～9月18日 保育実習
 9月20日～10月2日 小学校教生実習
 10月4日～12月11日 附中高教生実習

このように広島女子高等師範学校は、戦後において初めて授業を行い、教育実習まで実施する。原爆投下後、1ヶ月後には授業を実施するという異例な早さであり、歴史の浅い広島女子高等師範学校の復興に対する教職員の情熱が伝わってくる。体育科における音楽教員養成に魅力を感じて水野は異動したものの、授業時数等が原因で体育教員養成に限定され、音楽教員養成までには至らなかった。しかし、ピアノが数台しかない施設・設備にもかかわらず、根気よくピアノ指導を続け、体育科の学生たちはローテーションを組んで地道に練習していた。また、声楽を専門とする水野だけあり、女子学生の心に響く歌唱指導を行い、1948(昭和23)年には「春の学生音楽祭」において合唱を披露し、音楽文化の普及にも貢献している。



写真2 広島女子高等師範学校の運動会 1948(昭和23)年頃 於：安浦

出典 『記念誌』1989年, 176頁。

2. 広島大学教育学部福山分校音楽科

広島大学教育学部福山分校は、広島女子高等師範学校を母体として創設された教育学部安浦分校と、広島青年師範学校を母体として開設された教育学部福山教場が、1950（昭和 25）年、合体し、福山市の旧曙部隊跡に設置される。なお、同地には水畜産学部も置かれる³⁸。

音楽科は、広島女子高等師範学校体育科を母体として、1949（昭和 24）年、教育学部安浦分校に新設され、1950（昭和 25）年、教育学部福山分校に移転する³⁹。

四年課程には「高等学校教育科」と「中学校教育科」が併設される。二年課程は「中学校教育科」に属し、1958（昭和 33）年、募集を停止する。1964（昭和 39）年度から「高等学校教員養成課程音楽」、1972（昭和 47）年度から「高等学校教員養成課程音楽科」と改称する⁴⁰。なお、中学校教員養成課程は、1967（昭和 42）年度、教育学部東雲分校に移管される⁴¹。このように念願であった音楽教員養成は、広島大学昇格後に実現する。

教育学部福山分校学生定員については、1954（昭和 29）年度、高等学校教育科 70 名、中学校教育科 40、特別教科（保健体育）教員養成課程 30 名である⁴²。1961（昭和 36）年の『広島大学教育学部福山分校 要覧』を見ると、「音楽科」35 名、「体育科」55 名、「家政科」35 名と、教科ごとに定員が示され、備考には「高等学校中学校教員養成」と付記される。体育科の定員が多いのは、1954（昭和 29）年度に特別教科（保健体育）教員養成課程が設置されたためである。

1961（昭和 36）年度、高等学校教諭 1 級普通免許状が取得できる「教育専攻科（音楽専攻）」が設置される。1969（昭和 44）年度、「教育学研究科教科教育学専攻」（大学院修士課程）、1986（昭和 61）年度、博士課程後期が設置され、研究体制も整備される⁴³。

特別教科（音楽）教員養成課程が最初に設置されたのが、1952（昭和 27）年度に大阪学芸大学（現、大阪教育大学）であるから⁴⁴、新制大学発足の 1949（昭和 24）年度に音楽の高等学校教員養成に着手したのは広島大学と新潟大学教育学部高田分校「芸能学科」が該当する⁴⁵。

1) カリキュラム

表 5 は 1951（昭和 26）年度の履修単位表である。「教職教育」は 20 単位課せられる。内訳は、「教育心理関係」3 単位、「教育原理関係」3 単位、「教科教育法」3 単位、「教育実習」3 単位、「選択科目」8 単位で構成され、「教育職員免許法」と同一の単位数である⁴⁶。広島大学として最初の教育実習が実施された 1952（昭和 27）年においては、次のように計 4 週間行われた⁴⁷。

中学校教育科 附属中学校：2 週間＋附属高等学校：1 週間＋協力校：1 週間
 高等学校教育科 附属高等学校：2 週間＋附属中学校：1 週間＋協力校：1 週間

1954（昭和 29）年度の教育学部生には「約 3 ヶ月、内 1 ヶ月間は、毎日登校、あと 2 ヶ月間は追加実習として週約 2 回登校する」と規定される⁴⁸。1956（昭和 31）年度には再び計 4 週間に戻り、「尚数週間の追加実習を行うことがある」という表記になる⁴⁹。広島女子高等師範学校では 4 カ月であった教育実習が 1 ヶ月と期間は短くなる。ちなみに新潟大学教育学部高田分校では 8 週間の教育実習を課していたが⁵⁰、一般的には高等学校の教育実習は 2 週間程度であった。今日では違うが、1955（昭和 30）年度に特別教科（音楽）教員養成課程が設置された東京芸術大学においては、数日の期間で「各班から授業者を選出しその実地授業を参観し、研究会を開いて実習する」という参観が中心の方法で教育実習は重要視されていなかった⁵¹。これらのことから考えると、広島大学は独

自の工夫を凝らして丁寧に教育実習を展開している。

表6は1953(昭和28)年度の教科に関する専攻科目単位表である。「ピアノ、声楽、管弦打、理論」の4分野に分けられ専門に応じた教育が展開され、56単位が必修とされる。1949(昭和24)年の「教育職員免許法」では、音楽の中学校教諭1級普通免許状・高等学校教諭2級普通免許状を取得する際、「専門科目」の内「教科に関するもの」は18単位でよかった。したがって、広島大学のカリキュラムは、教育職員免許法よりもかなり上乘せして単位が課せられていたことが分かる。ちなみに東京学芸大学における中等教育学科の1952(昭和27)年度「専門科目」の内「専攻必修科目」と「選択必修科目」を合わせると、44単位であった⁵²。東京芸術大学では1949(昭和24)年度の音楽の「専門科目系列」は74単位であった⁵³。教育学部福山分校では小学校教諭免許状は取得できなかった。代わりに、中学校教員の複数教科担当の実情を考慮して、「副専攻教科課程」があり、保健、国語、英語、数学の中学校教諭2級普通免許状が取得できた⁵⁴。

その他、広島大学では「特殊研究」が4単位課せられ、初期においては卒業演奏のみであった。卒業演奏は、広島・福山の演奏会場、または学内において開催される。なお、卒業論文は、1957(昭和32)年度から卒業演奏に加えて課せられる⁵⁵。

1952(昭和27)年度以降、2ヶ年は皆実分校の教養部に在籍することになったけれども、教育学部福山分校と水畜産学部に関しては、1カ年のみ皆実分校で履修し、その後の一般教育の一部は各学部で行うことになる⁵⁶。とはいえ、単科大学とは異なり、1年次は音楽実技のレッスン等の専門教育が実施できないカリキュラムであった。

表5 履修単位表 1951(昭和26)年度

	一般教育	専門教育	教職教育	体育科目	計
四年課程	36	64	20	4	124
二年課程	18	29	15	2	64

出典『広島大学二十五年史 部局史』1977年、284頁。

表6 教科に関する専攻科目(必修)単位表 1953(昭和28)年度

科目	題目	ピアノ	声楽	管弦打	理論
声楽	声楽	5	12	3	3
合唱	唱歌	8	8	8	8
	合唱	6	6	6	6
器楽	ピアノ	12	6	5	8
	管弦打	5	4	12	3
	合奏	4	4	6	6
音楽理論	理論	6	6	6	12
音楽史	音楽史・美学	6	6	6	6
	特殊研究 (卒業演奏のための研究)	4	4	4	4
計		56	56	56	56

出典『広島大学二十五年史 部局史』1977年、291頁。

2) 教員組織

表7は教員組織を一覧にしたものである。広島大学教育学部創設時の音楽教員は、広島女子高等師範学校から異動した糸賀英憲、水野康孝、貫名美名彦の3名であった。

糸賀は1941(昭和16)年12月、東京音楽学校甲種師範科を卒業後、横浜市の高等女学校へ勤務。その後、広島女子高等師範学校創設の準備段階から勤務し、広島大学教育学部の教員となる⁵⁷。

一方、東京音楽学校本科声楽部を1916(大正5)年3月に卒業した水野は、1929(昭和4)年まで大阪音楽学校で教える⁵⁸。1925(大正14)年、大阪府立女子専門学校へ着任する⁵⁹。1946(昭和21)年、大阪府立女子専門学校から広島女子高等師範学校へ異動する。貫名の着任を含めて、木村信之からのインタビューの中で水野は次のように証言する⁶⁰。

広島女子高等師範学校は終戦の年にできて、原爆にもあった学校ですが、その広島女高師の教頭が音楽が好きで、私のことをよく知っていて、私に「来てくれ」というんです。「いや、私は大阪でみんなにかわいがってもらっているから」といったら、「いや、それはそれとして、新しい分野だからぜひ来てください」といわれるので、校長に相談したら「広島へ行ってあげてくれ」と。「それじゃ、私はないしよで行きます、みんなに止められるのはわかっていますから」と、皆にはだまって行き、あとで発令になって初めて、あちこちにご挨拶しました。

広島へ行きまして、2年ほどたったら、新制大学ができるということになりました。教頭が、「あなたにわざわざ来てもらったのに、このまま立ち切れてはすまない」と。そこで、お茶の水がやっているように、体育と音楽の両方の免許状を出す。それを広島は考えている。「ここでひとつ旗揚げをしたいと思うから、だれか、あなたのほかにりっぱな人を一人連れてきてくれ」と。で、私が音楽学校で教えてもらった貫名美名彦という先生、その方が四国の学校におられて、様子を聞いたらひじょうに不遇だというので、私が口説きに行つて来てもらいました。

音楽教員養成を実現するために水野の紹介で異動した貫名は1910(明治43)年3月、東京音楽学校本科器楽部卒業後、東京音楽学校教授を務め、ピアノ、フルート、管弦楽を教えていた⁶¹。広島女子高等師範学校着任直前は、愛媛師範学校に在職していた⁶²。

糸賀は「合唱」、水野は「声楽」、貫名は「器楽」を担当し、「音楽理論」は非常勤講師で、日本交響楽団(現、NHK交響楽団)指揮者であった高田信一(1954年以降専任)、「音楽史」は非常勤講師の赤木仁兵衛が担う⁶³。

岡山県出身の水野は、1950(昭和25)年、広島大学教授兼岡山大学教授となり、週1回、岡山大学の授業も担当し、1951(昭和26)年、岡山大学教育学部教授として異動し、オペラの実践で着目される⁶⁴。このように広島大学は、声楽を専門とする水野を失うわけだが、1950(昭和25)年、高山教子、1951(昭和26)年には車田謁也と東京音楽学校教授であった木下保を迎える⁶⁵。この点から考えても、声楽重視の教員組織を行っていたことが分かる。また、1951(昭和26)年には木下、車田に加え、田村五郎、佐藤正二郎の4名の演奏家が着任し、学生たちは喜ぶのと同時に、「西の芸大を目指そう」と意気盛んな雰囲気を生み出す⁶⁶。

糸賀は戦前から、水野、貫名は戦後の広島女子高等師範学校から、広島大学教育学部福山分校音楽科の教員となり、教員組織における連続性が確認できる。広島師範学校からの異動はない。糸賀、水野、貫名の3名に共通することは、東京音楽学校出身者ということである。その後の人事を見ても、東京音楽学校出身者によって占められていることが分かる。広島女子高等師範学校出身者はい

ない。しかし、1955（昭和30）年になると、広島大学教育学部を1953（昭和28）年に卒業した大塚康生が着任する。

表7 教員組織

氏名	科目	最終卒業学校	着任	備考
糸賀英憲	合唱	東京音楽学校甲種師範科 1941年	1949	～1981
水野康孝	声楽	東京音楽学校本科声楽部 1916年	1949	～1951
貫名美名彦	ピアノ	東京音楽学校本科器楽部 1910年	1949	～1954 元東京音楽学校教授
高山教子	声楽	東京音楽学校甲種師範科 1939年	1950	～1981
田村五郎	ヴァイオリン	東京音楽学校本科器楽部 1937年	1951	～1971
佐藤正二郎	打楽器	陸軍戸山学校軍楽隊 1935年	1951	～1977
車田舘也	声楽	東京音楽学校本科声楽部 1939年	1951	～1978
木下保	声楽	東京音楽学校本科声楽部 1926年	1951	～1953 元東京音楽学校教授
高田信一	作曲・指揮	東京音楽学校本科作曲部 1941年	1954	～1960
橋本清司	教育	東京音楽学校甲種師範科 1933年	1954	～1969
諏沢太郎	美学	京都大学 1931年	1951	～1969 1957年度までは一般教養
大塚康生	ピアノ	広島大学教育学部 1953年	1955	～1966

出典 『日本教育大学協会第二部音楽部門中国地区連合協議会資料』1962年、『広島大学二十五年史 部局編』1977年、289頁、『記念誌』1989年、22頁から作成。

3) 施設・設備

1950（昭和25）年から旧暁部隊の兵舎を校舎として授業が行われる。かなり傷んだ校舎だったため、1957（昭和32）年に木造の新校舎が完成し、木造平家2棟、建築面積515平方メートルで、講義室3、レッスン室・練習室28、合奏室1、教官室1、器具室・倉庫3等があり、1968（昭和43）年3月まで使用される⁶⁷。吸音はある程度考慮されていたものの、遮音能力はほとんどなかった。個室の教官研究室はなく、教官全員と事務官が一つの教官室に集まっていた⁶⁸。表8は、1962（昭和37）年度の現状である。ピアノを含め、楽器環境が整備されつつある。

前述の通り、戦前の広島市千田町にあった広島女子高等師範学校の校舎は原爆で焼失してしまったため、戦後は吉田町、安浦町、そして福山市へと移っているため、当然のことながら施設・設備に関しては連続性はみられない。

表8 音楽教育施設の現状 1962（昭和37）年1月

研究室	教室	練習室	総建坪	ピアノ	管弦打楽器		
					管楽器	弦楽器	打楽器
8	2	29	336坪	35	35	32	28

出典 『日本教育大学協会第二部音楽部門中国地区連合協議会資料』1962年。

4) 演奏会

最初に開催された音楽会は、1950（昭和 25）年 11 月 7 日の「音楽と体育の夕べ」である。教育学部福山分校への統合記念の行事で、音楽科の学生だけでなく、体育科の学生も参加した。ベートーヴェンの《ピアノソナタ 熱情》や、舞踊、組立運動、体操競技等のプログラムで構成される⁶⁹。

1953（昭和 28）年 2 月、「広島大学音楽科交響楽団」が組織され、第一回定期演奏会が開催される。指揮は当時、非常勤講師であった高田信一により、ビゼー作曲「アルルの女」第二組曲、ビゼー作曲オペラ「カルメン」より《花の歌》、独唱は教員の木下保。ベートーヴェン作曲「ピアノ協奏曲第五番」、ピアノ独奏は当時学生であった大塚康生であった。以来、1959（昭和 34）年まで高田の指揮の基に基礎が築かれる⁷⁰。



写真3 第2回広島大学音楽科定期演奏会 1953（昭和 28）年 大塚康生のピアノ独奏
出典 『記念誌』1989年，195頁。

5) その他

図1は、1953（昭和 28）年から 1961（昭和 36）年までの広島大学教育学部福山分校音楽科の卒業生就職先状況をまとめたものである。80%の卒業生が中学校、高等学校へ就職し、中等教員養成としての本来の目的を達成している。

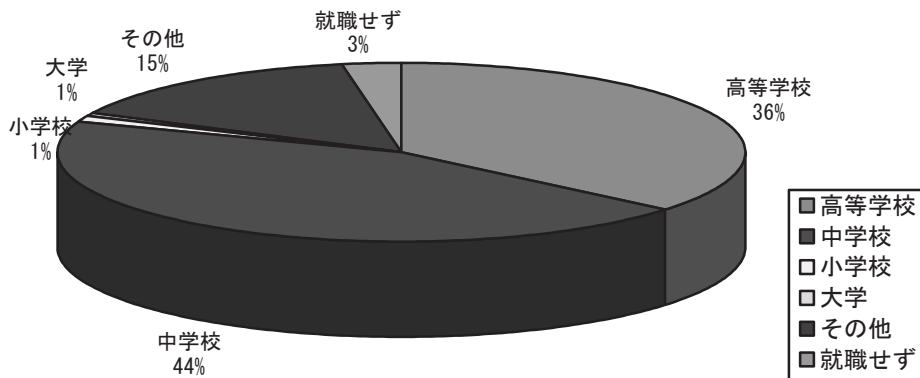


図1 卒業生就職先状況 音楽科 1953（昭和 28）～1961（昭和 36）年
出典 『広島大学教育学部福山分校 要覧』1961年から作成。

おわりに

広島女子高等師範学校体育科は、東京女子高等師範学校体育科で行っていた体育・音楽教員養成を図ろうとしていた。しかし、授業の初日、原爆に直撃し、戦前は一度も授業を実施できなかった。そのような中、1945（昭和20）年9月7日という異例な早さで授業を開始する。戦後においても体育・音楽教員養成を試みてはいたのだが、授業時数等の関係で実現できず、体育教員養成に留まっていた。ただし、体育科の中で「音楽理論」「声楽」「器楽」「美学」といった音楽の専門教育が組み込まれ、ピアノの台数が少ないにもかかわらず、ピアノの指導も根気強く行われた。

戦後の広島女子高等師範学校では、東京音楽学校出身者の糸賀、水野、貫名の3名の音楽教員で組織され、昇格した広島大学教育学部福山分校に異動し、連続性が確認できる。広島師範学校からの異動はなかった。1962（昭和37）年度には、10名の専任教員で構成され、音楽教員養成としての組織の拡大が見られ、高等学校教員養成や研究者養成といった独自色を発揮する。

音楽の専攻科目については、教職員免許法の規定よりはるかに多い56単位が課せられ、「ピアノ、声楽、管弦打、理論」の4分野に分かれ、音楽の専門教育が展開される。教養部との関係で1年次にはレッスンが実施できないという課題もあったが、「西の芸大を目指そう」と意気盛んな雰囲気を生み出す。1953（昭和28）年2月には「広島大学音楽科交響楽団」が組織され、定期演奏会も開催され、地域への音楽文化の普及にも貢献している。一方、教育実習においては独自の工夫が練られ、教員養成という側面も堅持している。そのようなこともあり、8割の卒業生が中学校、高等学校の音楽教員として就職し、養成目的も達成する。

ところで、東京高等師範学校には「図画手工専修科」があったため、それを母体に東京教育大学教育学部芸術学科が発足した⁷¹。広島高等師範学校では、1930（昭和5）年、「第二臨時教員養成所」において「図画手工科」が設置されたものの、1回の卒業生を出したきりで、閉じてしまった⁷²。そのため発足当初の広島大学においては美術科（図画工作科）が置かれていなかった。このような状況だったため、1959（昭和34）年、教育学部東雲分校に四年課程の中学校教育科「図画工作科」（1962年、「美術科」と改称）が設置される。このように美術は、高等師範学校、女子高等師範学校に母体となる組織がなかったために、広島師範学校が母体となり、美術教員養成を樹立した。

「はじめに」で紹介した「v」に該当する帝国大学と再編した東北大学の場合、宮城師範学校は「北分校（教育教養部）」に位置付けられ、学部の前半の2年間のみの教育に携わることになった⁷³。しかし、音楽、美術、保健体育、家庭については、該当する学部がなかったために、北分校が担当し、音楽教員養成は宮城師範学校が母体となり実施された。一方、広島大学の場合、広島女子高等師範学校に体育科とはいえども、体育・音楽教員養成を図ろうとしていた組織があったため、音楽教員養成は広島女子高等師範学校を母体に樹立する。その反面、広島師範学校を母体とする教育学部東雲分校は1966（昭和41）年度までは音楽科に関しては初等教員養成に限定されていた。

最後に全国の動向を俯瞰すると、師範学校と再編された新制大学における音楽教員養成は、広島大学を除き、師範学校が母体となって樹立される。したがって本稿で取り上げたのは、女子高等師範学校を母体に音楽教員養成を樹立した全国で唯一の事例である。

今後は、5ケースの事例に基づき、再編に伴う各大学の特色を整理、総括していきたい。さらには、全国に設置された特別教科（音楽）教員養成が地方へ与えた影響についても調査していきたい。

付記

本稿は、日本音楽教育学会中国四国地区例会（2014年3月15日、於：鳴門教育大学）における口頭発表の内容を発展させたものである。なお、本研究はJSPS科研費 24730755（若手研究B「師範学校から新制大学再編における音楽教育実践に関する研究」）の助成を受けた。

注

- 1 戦後の金沢高等師範学校では、1947（昭和22）年、理科に加えて文科が置かれた。金沢大学50年史編纂委員会編『金沢大学50年史』部局編，1999年，285頁。
- 2 寺崎昌男「大学における教員養成の出発」海後宗臣監修『教員養成』戦後日本の教育改革第八巻，1971年，85-109頁。
- 3 三好信浩『日本師範教育史の構造：地域実態史からの解析』東洋館出版社，1991年。
- 4 竺沙知章「旧高等師範学校・文理科大学系大学における「教育学部」の成立」TEES研究会編『「大学における教員養成」の歴史的研究：戦後「教育学部」史研究』学文社，2001年，219-231頁。
- 5 三好，前掲書，344頁。
- 6 田中卓也「広島女子高等師範学校と女子学生文化の胎動」『広島大学史紀要』第9号，2007年，21頁。
- 7 鈴木慎一郎「高等師範学校，女子高等師範学校における音楽教員養成：東京女子高等師範学校，広島女子高等師範学校体育科での「体育・音楽教員養成」を中心として」『関西楽理研究』XX，関西楽理研究会，2003年，58-65頁。
- 8 鈴木慎一郎「戦前における音楽教員養成の独自性：美術・体育との比較から」『芸術教育実践学』第7号，芸術教育実践学会，2006年，16-24頁。
- 9 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』1984年，185頁。
- 10 奈良女子大学六十年史編集委員会編『奈良女子大学六十年史』1970年，106頁。
- 11 『「時」のかたみに』広島女高師誌編集の会，1998年，173頁。
- 12 同書，35頁。
- 13 8月6日に亡くなったのは7名（内体育科4名），被爆が直接の原因と思われる1947（昭和22）年までの物故者2名。同書，71頁。
- 14 広島大学二十五年史編集委員会編『広島大学二十五年史 包括校史』1977年，463-470頁。
- 15 『東京女子高等師範学校規則』1943年，30-32頁。
- 16 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編『お茶の水女子大学百年史』1984年，575頁。
- 17 掛水通子「戦前のわが国の女子体育教師の教育に関する研究」『東京女子体育大学紀要』第30号，1995年，14頁。
- 18 「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会編，前掲書，78頁。
- 19 藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会編『藤村学園100年のあゆみ』藤村学園，2002年，10頁。
- 20 同書，9頁。
- 21 寺田和子『気骨の女』白揚社，1997年，154頁。
- 22 渡辺裕『歌う国民』中央公論新社，2010年，92頁。
- 23 藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会編，前掲書，38頁。
- 24 船寄俊雄・無試験検定研究会編『近代日本中等教員養成に果たした私学の役割に関する歴史的研究』学文社，2005年，398頁。
- 25 藤村学園創立百周年記念記録等作成実行委員会編，前掲書，57頁。
- 26 『広島大学二十五年史 包括校史』前掲書，471-472頁。
- 27 同書，69頁。
- 28 同書，486頁。
- 29 『「時」のかたみに』前掲書，183頁。
- 30 同書，184頁。
- 31 同書，84-85頁。
- 32 同書，201頁。

- 33 同書, 190-191 頁。
- 34 同書, 180 頁。
- 35 同書, 216 頁。
- 36 同書, 215 頁。
- 37 同書, 255 頁。
- 38 広島大学二十五年史編集委員会編『広島大学二十五年史 部局史』1977 年, 279 頁。
- 39 同書, 288 頁。
- 40 広島大学教育学部福山分校記念誌編集委員会編『記念誌』祥文社, 1989 年, 14 頁。
- 41 『広島大学二十五年史 部局史』前掲書, 281-282 頁。
- 42 同書, 286 頁。
- 43 広島大学教育学部福山分校記念誌編集委員会編, 前掲書, 14 頁。
- 44 上原一馬「特別教科(音楽)教員養成課程の現状: その問題点と改善策」『季刊音楽教育研究』第 19 卷第 2 号, 音楽之友社, 1976 年, 71 頁。
- 45 新潟大学『新潟大学便覧昭和 24 年度』1949 年, 68-69 頁。
- 46 『広島大学二十五年史 部局史』前掲書, 325 頁。
- 47 同書, 176 頁。
- 48 三好信浩「第 5 章 専門職としての力量形成の方策: 教育実習の役割」『中等教員史の研究: 広島高等師範学校・広島大学における中等教員養成の歴史的展開』第一輯, 広島大学教育学部日本東洋教育史研究室, 1987 年, 192 頁。
- 49 同書, 193 頁。
- 50 新潟大学二十五年史編集委員会編『新潟大学二十五年史 部局編』1980 年, 376 頁。
- 51 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 音楽学部篇』音楽之友社, 2004 年, 594 頁。
- 52 東京学芸大学二十年史編集委員会編『東京学芸大学二十年史: 創基九十六年史』1970 年, 170 頁。
- 53 東京芸術大学百年史編集委員会編, 前掲書, 69 頁。
- 54 音楽副専攻は二年課程募集停止後なくなった。『広島大学二十五年史 部局史』前掲書, 283 頁。
- 55 同書, 293 頁。
- 56 同書, 855 頁。
- 57 <http://home.hiroshima-u.ac.jp/forum/31-3/toku6.html>
- 58 大阪音楽大学 80 年史編集室『大阪音楽大学 80 年史: 学のみなびや』大阪音楽大学, 1996 年, 72 頁。
- 59 大阪府女子専門学校在職期間: 1925 (大正 14) 年 3 月 31 日~1946 (昭和 21) 年 4 月 30 日。五十周年記念事業委員会『大阪女子大学五十年史』1976 年, 224 頁。
- 60 木村信之『音楽教育の証言者たち上戦前を中心に』音楽之友社, 1986 年, 112-113 頁。
- 61 東京音楽学校の在職期間は 1910 (明治 43) 年 4 月から 1947 (昭和 22) 年 3 月まで。東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇 第二巻』音楽之友社, 2003 年, 1569 頁。
- 62 『「時」のかたみに』, 前掲書, 184 頁。
- 63 『広島大学二十五年史 部局史』前掲書, 290 頁。
- 64 木村, 前掲書, 113-114 頁。
- 65 木下保は, 1953 (昭和 28) 年 11 月以降, 東京学芸大学教授として異動 (~1967 年 3 月)。東京学芸大学二十年史編集委員会編『東京学芸大学二十年史: 創基九十六年史』1970 年, 344 頁。
- 66 広島大学教育学部福山分校記念誌編集委員会編『記念誌』祥文社, 1989 年, 15 頁。
- 67 『広島大学二十五年史 部局史』前掲書, 294 頁。
- 68 広島大学教育学部福山分校記念誌編集委員会編, 前掲書, 17 頁。
- 69 同書, 19-20 頁。
- 70 『広島大学二十五年史 部局史』前掲書, 293 頁。
- 71 鈴木博雄『東京教育大学百年史』図書文化社, 1978 年, 642 頁。
- 72 『広島大学二十五年史 包括校史』前掲書, 31 頁。
- 73 鈴木慎一郎「東北大学教育学部における小学校教員養成: 宮城師範学校から東北大学教育学部へ」『地域学

論集（鳥取大学地域学部紀要）』第9巻第3号，2013年，34頁。

（2014年6月6日受付，2014年6月26日受理）